

青年期における自己決定性の発達的变化

岩淵将士 (東北大学)

キーワード：自己決定性、横断的調査、青年期

問題と目的

現代社会において自ら主体的に課題に向き合い、より良い社会と人生の創り手となる力を身につけることの重要性は高く (文部科学省, 2016) 高等教育においても主体的に行動できる人材の育成が求められている (文部科学省, 2012)。しかし、主体性や主体的行動を明確に定義した研究は少なく、それは主体性概念の多様性 (田畑, 2016) のためと推測される。そこで本研究では、多様な要素を持つ主体性概念の下位概念として自己決定性を位置づける。自己決定性は自己決定理論 (Deci & Ryan, 2002) を中心に豊富な知見が蓄積されてきたが、自己決定理論は文化的共通性がある (Deci & Ryan, 2002) としつつも、より具体的な領域において文化による独自性が指摘されている (Agawa & Takeuchi, 2016)。

日本では他者との協調が自己価値と関わることに指摘されており (Kitayama & Uchida, 2003)、主体的に自己決定するためには他者との関係性という視点も組み込むことが有意義と考えられる。そこで本研究では、他者から社会的に影響を受けた上での意思決定と主体的な意思決定を包括的に捉え、主体性の涵養が求められる青年期における発達的变化を検討することを目的とする。

方 法

中学生 431 名 (平均年齢 14.60 歳; 男子 224 名, 女子 207 名), 高校生 250 名 (平均年齢 16.58 歳; 男子 125 名, 女子 125 名), 大学生 843 名 (平均年齢 19.38 歳; 男子 683 名, 女子 160 名) に対して質問紙調査を実施した。そのうち、学校段階と性別で対応づけるため、各学校段階で男女 125 名ずつ (計 750 名) となるように中学生と大学生の調査対象者からランダムに分析対象者を抽出した。調査は自由意志によって行われ、回答しないことによる不利益が生じないこと等を明示した。使用尺度は岩城 (2011) の主体性・被影響性尺度 2 因子 22 項目のうち、高校生や大学生にも適用可能と判断した 15 項目であり、5 件法で回答を求めた。分析には R (ver3.4.2) を用いた。

結 果

まず、分析対象者全体で重み付け最小二乗法・オブリン回転による探索的因子分析 (EFA) を行った。単純構造が得られるまで項目を順次削除し、最終的に各学校段階共通の 12 項目 3 因子構造が採用された。原尺度とは異なる因子構造であ

ったため、第 1 因子から順に「自己選択」「反論耐性の低さ」「同調的選択」と命名した (Table 1)。

Table 1 自己決定性の探索的因子分析結果

	1)	2)	3)
1)自己選択($\alpha=.81$; 中: $M=3.75(.69)$, 高: $M=3.46(.68)$, 大: $M=3.88(.60)$)			
自分のことは、自分でなんとかしようとする。	.73	.08	-.04
何か問題が起こったとき、自分で何とかする方法を考えようとする。	.71	-.04	.02
これはやって良いか悪いかを、自分で考えて行動しようとしている。	.66	.14	-.05
自分の言ったことを自分できちんと理解しようとしている。	.63	-.13	.09
自分で考えて、自分のやるべきことを見つけようとする。	.62	-.03	-.13
迷ったときに人に相談はするけれど、最後には自分で決めようとする。	.52	-.15	.19
2)反論耐性の低さ($\alpha=.79$; 中: $M=2.87(.95)$, 高: $M=2.98(.83)$, 大: $M=2.75(.93)$)			
自分で出したよい意見でも、周囲に反対されると、理由をよく調べないで、すぐ、取り消してしまう。	-.03	.81	-.06
自分なりの考えを持っていても、それを反対されるとすぐに自信がなくなってしまう。	.06	.64	.17
他の人から反対されると、すぐに自分の意見を変えてしまう。	-.03	.60	.20
3)同調的選択($\alpha=.72$; 中: $M=2.57(.91)$, 高: $M=2.96(.80)$, 大: $M=2.89(.89)$)			
活動するとき、友達と一緒にでないと、心配になる。	.00	.05	.70
まわりの友達が自分と同じことをしていないと、心配になる。	-.01	.03	.63
何も考えず、つい、友達がやっていることの真似ばかりをしようとする。	-.10	.20	.50
因子間相関			
	1)	2)	3)
		-.23	-.11
			.65

※各下位尺度の内的整合性と各学校段階の平均値 (標準偏差) を表中に示した。

次に、EFA の結果を基に多母集団同時分析による確認的因子分析を行った。母数の推定には対角重み付き最小二乗法を用いた。配置不変モデルから順次等値制約をかけた結果、各学校段階で因子負荷量、切片、誤差分散に等値制約を課した測定不変モデルが採用された (CFA=.99, RMSEA=.02)。このモデルに平均構造を導入した結果、「自己選択」は高校生が最も低く、「同調的選択」は中学生が最も低いことが示された (Table 2)。

Table 2 各潜在因子の切片と標準誤差 (非標準解)

	中学生		高校生		大学生	
	切片	SE	切片	SE	切片	SE
自己選択	.00	.34	-.27	.32	.12	.23
反論耐性の低さ	.00	.75	.31	.53	.09	.69
同調的選択	.00	.61	.39	.43	.32	.57

考 察

本研究では、主体性の下位概念と位置付けた自己決定性を他者との関係性も含めて捉え、横断的調査による発達的变化を検討した。多母集団同時分析の結果から、中学生では自ら意思選択する傾向が強いが、高校生では他者からの影響を受けやすく、大学生では自己と他者を統合した自己決定性が獲得されることが示唆された。以上より、特に高校生では主体的な自己選択を支持する関わりが重要であると考えられた。